

---

# 春がきた

朋次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春がきた

### 【Nコード】

N3054Q

### 【作者名】

朋次郎

### 【あらすじ】

別れをテーマに・・・。

5歳の息子、ヒロの余命があと1か月をきったところ、佐和子はある著名な緩和ケアの専門病院に入れた。

それも最上階の最高級の個室。田舎の山の4階建て、まわりの景色が綺麗。富士と言われる100名山にも入る山を目前に。季節は3月。桜のつばみがほころびかける。

この桜が咲くと、私のヒロは……。佐和子はそういうことはもう考えなくなかった。病気のことはもう考えなくなかった。

ヒロはもう最終段階に来ている。5歳の子でも余命のことはわかっていようだが決して口にはしない。だがここに来てもう苦しい治療はしなくてもよい、というのがわかるだけだ。うつらうつらと寝ていることが多い。だが5分でも目を開けていると外を見たがる。だからヒロのベッドは窓際ぎりぎりによせさせてもらっている。部屋は広くソファベッドが1つ（つきそいが寝れるようになってい）テーブル1つ。シャワートイレに湯船のあるお風呂。趣味の良い絵画もかけてある。もっともこれはヒロの希望で自分が描いた恐竜の絵に替えた、というよりその絵画の上に画用紙をセロテープで貼っているだけだ。

ここは緩和ケアで著名な医師がいて佐和子は絶大な信頼をおいていた。事実入院してもう3週間もたったがヒロは痛いとは一言もいわない。

1年間つけた化学療法のせいで髪は抜け皮膚が荒れ口内炎でろくにごはんも食べられない状況だったが驚いたことに入院3日目でいちごを欲しがり4個も食べたのである。そして少しずつだが食欲も戻り昨日はヨーグルトを2つとチーズも食べてくれた。夕食のグラタンも半分食べてくれてうれしかった。ここ数力月は固形食は食べられず大好きなゼリーやヨーグルトもいらなという始末だったので食べ物の味がわかりかつおいしいというヒロに佐和子は狂喜した。

そして経済的には無理というか無茶をしてもこの病院に入れてよかったと心から思った。

薬はもうない。注射もない。この1年24時間ずっと点滴の細長いひもがくつついていた状況だったので本人のみならず佐和子の解放感もすごかった。痛み止めは口からは飲む分もなく、パッチといって小さな湿布薬みたいなものを張りつけるだけだ。

毎日医師の巡回診察があり、看護婦の訪室も頻繁にある。希望すれば牧師もお坊さんもきてくれる。ボランティアも控えていて希望すれば買物も話し相手もしてくれるという。だがそういうオプションは佐和子は頼まず自分ひとりでヒロの最後を看取りたかった。

佐和子が中学生のころ、母ががんの末期に亡くなったとき、その苦しみぶり、痛い痛いとうめきながら苦しんでいる様子を見知っていただけに医学の特に緩和ケアという進歩に眼を見張った。

あと1カ月ももてばいいほうでしょう。と以前の病院の医師はいった。ちゃんとこちらの心情を理解しながらまたこちらが納得するまで根気よく説明にに応じてくれる良い医師だったが、親の繊細な感情まではここはこうなるでしょう、とかまでは説明はしない。佐和子はここまでくるに、どれだけ親として苦しんだかまたヒロも幼い心でどれだけ苦しんだか誰にもわからないだろうと思う。

だが事態はもうそこまできている。ヒロといられるのもあとわずか。

幸いヒロはずっと寝ている状態ではないし、意識もある。佐和子はヒロがずっと眠る・つまり永眠するまで家には帰らない覚悟だった。ヒロには兄弟はいない、父親もいない。佐和子の夫というより彼は内縁関係だったのでヒロを妊娠したとわかると佐和子に子供を下ろすようにと指示してお金を渡した。要は佐和子を捨てたのだ。そんな話はもういい。この個室は1泊2万6000円もするがそんな経済的な事も後回しだ。要はヒロとゆっくり過ごしたい。ヒロはまだ小さくて彼女もいない。ヒロはまだ母親を欲していて私の姿

が少しでも見えないと「おかあさん」と呼ぶ。ある意味これではよかったと思うのは親のエゴか。まだ幼いまま、かわいらしい男の子のままでヒロは逝こうとしている。佐和子はヒロの顔をじっと見つめる。目をこらして見つめる。

佐和子はヒロが薄眼を開けたのに気付き、「起きたの？」と声をかける。ヒロが軽くうなづいたので「何か食べる？」ときいた。「ヨーグルトのキャラメルある？」「あるわよ」そつと箱を開けてやり白い包み紙をはずしてやる。ヒロは小さな口を開けてキャラメルを口にふくんだ。そしてにこつと笑う。

病気になる前はこの子だってキャラメルどころか大きい飴玉を歯でがりがりやと噛んで食べてしまう子だった。「あめやキャラメルというものは舐めて溶かすものよ。噛んで食べると虫歯になっちゃうよー」と佐和子は何度注意したかわからない。ポテトチップスが大好きでほっておくといくらでも食べる。この部屋にも何袋か用意してはいるがまだ欲しがらない。まあ、いい。

佐和子もヨーグルトキャラメルを口にふくんだ。ヒロの笑顔が大きくなった。

「おかあさん、おいしい？」

「うん」

「おかあさん、こっちきて」

「紙と鉛筆ある？」

「あるわよ」

「もってきて」

佐和子は何でもヒロのいうとおりにするつもりだ。あれをこうしろ、これを早くしろとかはもう言わない。小言も言わない。

急いで画用紙をとってきてやり、鉛筆、それから言われてないがクレヨンももってきてやった。

「クレヨンは使わないよ」

「あ、そう？」

ヒロが起き上がろうとしたので、佐和子は驚いた。いつものよう

に身体を横に向けて絵をかいたりするかと思ったのに。大丈夫かと背中を添えてゆっくりと上体をおこしてやった。それからベッドも操作して背中に沿うようにしてやる。パジャマ越しに見える背骨の骨がごつごつして痛ましい。

ベッドテーブルを取り出して大きな画用紙を置いてやった。また恐竜の絵を描くのかな？佐和子は息子の絵の才能を高くかっていた。5歳の子供にしてはオリジナルティのある迫力のある恐竜の絵を描くからだ。だが、息子は何か文字を書こうとしている。

「おかあさんは見ちゃ、だめ」

「えーそうなの？」

「おしっこにでもいっておいで」

ヒロがそんなことをいうのは初めてだ。佐和子はくすくす笑いながらトイレにたった。

手洗いをすませてトイレの戸を細めにあけて「入ってもいいですか」と聞いた。

ヒロは笑いを含んだ声で「いいですよ」という。張りのない小さな声。病気になる前はこの子も大きな声でひっきりなしにしゃべっていてうるさい！少しは静かにしてっ！と何度怒ったことか。考えないようにしようと思ってもつい考えてしまう。

ヒロはもうベッドにもたれて窓に顔を向けている。窓開けてと言われるよりも前に佐和子は窓のカーテンを開けてやった。今日は空が綺麗でところどころ刷毛ではいたように白い雲が薄くかかっている。富士が本物の富士山のように綺麗だった。桜がほころんだのかところどころ山にピンクのもやがかかっていた。

「おかあさん、これお手紙だよ。ヒロからお手紙がきたよ」

佐和子は心が浮きだつて武骨に折りたたまれた画用紙をゆっくり開く。開きながら歌った。

「白ヤギさんから手紙がきて、黒ヤギさんたら食べちゃって・・・」

「おかあさん、歌がめちゃくちゃヘンだよ」

ヒロは笑顔だった。

8つ切りの画用紙の真ん中に縦書きに文字が書いてある。

「おかさんらすき」

ヒロはやつとひらがながかけたところで読みにくい。だが自分から文字を書いたのは初めてではないだろうか。「か」と「ら」の文字が反転して鏡文字になっていた。「ん」の字もなぜか上下さかさまである。かろうじて読める歪んで力のない文字だったが佐和子はいれなかった。ヒロはいつのまにかベッドの背もたれにもたれている。もうしんどくなったのかと思いベッドを平らになおした。ヒロは横になったままで佐和子の顔をじつと見ている。佐和子も微笑した。

「ねえ、おかさんらすき、ってなに？」

「おかあさん・・・」

「ん？」

「ぼく、おかあさん、だいすきってかいたの！」

佐和子は書かれた文字をもう一度よく見た。確かに「おかさんらすき」と書いてある。おかあさんだいすき！だ。

「ヒロ、ありがとう！」

ヒロはもう寝ていた。佐和子のはつとした。来るべき時がきてしまったのだ・・・。

ヒロの顔はやすらかで少し微笑んでいた。佐和子はヒロの頬に自分の頬を寄せた。そして自分の腕をまわしヒロの肩を抱いてやる。そしてヒロのベッドに入り2人で寄り添って寝た。

佐和子はいつまでもいつまでもそうしていた。暖かかったヒロの体温が下がっていく。

・・・春がもう来てしまったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3054q/>

---

春がきた

2011年3月22日22時25分発行